



大学生だったころ

国際基幹教育機構・教授

前川 真行

大学入学後のある日、サークルボックスで、コーヒーでも飲みませんかと先輩に誘われ、法経七番教室のある建物の地下に降りてゆくことになった。らせん状になった階段の下の部分に、ベニヤ板を使って、いかにも勝手に作り出したという「ボックス」があった。やはり手作りのドアは真っ黒で、白い字でその「サークル」の名前が書いてあった。やべえな、間違ったかとも思いはしたのだが、生来の軽率さから誘われるままになかに入ると、一枚の写真から目が離せなくなった。白黒の薄暗い写真には、かなりボケて、かろうじて男性と分かる人物が写っており、その背後の壁だが窓だかには、独特の字体で書かれた「日本赤軍」という文字があった。その瞬間から、まずいインスタントのコーヒーを飲みつつ、どうやってこの場を切り抜け、平和裏に下宿に帰るかだけを考えていた。

この瞬間の私の感情を今の若者に説明するのは難しい。大学に入ってはじめてできたボーイ／ガール・フレンドが家に誘ってくれたので、こんな私にも春は来るのだと、ドキドキしながらついていたら、なぜかそいつは共同生活をしていて、不必要に高い壺だか洗剤だかをローンで買いませんか

大阪公立大学

大学での幅広い学びの道しるべ

No. 2 Un roseau

新入生の皆さんに向けて、先生方からご自身の専門分野やご経験に基づき「大学で学ぶ意義や面白さ」について語っていただいています。多彩な学問の世界に触れて、あなたの大阪公立大学での学びの可能性を広げてください!

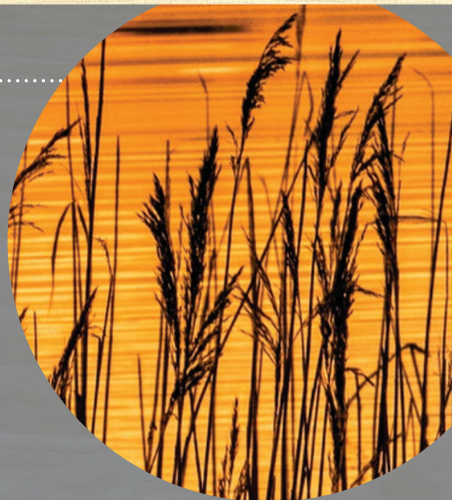
タイトル“Un roseau (アン ロゾ)” —— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascalは言うのです。

L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナチュール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。 ——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。Un roseauとは「あなた」のことなのです。



「スポーツを通じた」 大学での学びについて

国際基幹教育機構・准教授

今井 大喜



はじめに

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。このたび、皆さんに向けて「大学での学び」について語る機会をいただきましたので、それに一言「スポーツを通じた」を添えて語りたいと思います。

私がこの言葉を加えた理由は、自分自身がこれまでスポーツを通じて多くの学びを得たからであり、単に楽しめること以上に受け得る恩恵を、皆さんにもぜひ享受いただきたいとの願いがあったからです。私は、小学校から大学を卒業するまでの間に、主に水泳、サッカー、陸上競技、競技スキーなどのスポーツを学校体育・課外活動、地域クラブで経験し、今は生涯スポーツとして、硬式テニス、フットサル、レクリエーションスキーを仲間と時間を見つけては楽しんでいます。人生の各ステージにおいて、家族や友人、諸先輩からの影響や自らの興味など、様々なきっかけが縁となってこれらのスポーツを経験してきました。特定のスポーツを追求してきたわけではないのですが、個人スポーツ、チームスポーツ、シーズンスポーツと、様々な特性のスポーツを経験できたことが、私の

と勧めてきたという状況が想像できるなら、多少は分かってもらえるかもしれない。

*

小学生の頃から大学に行きたいと漠然と考えていた。私が生まれたのは、山が垂直に海に突き刺さっているような地形のいわゆる漁師町だった。わざわざ大学に行きたいと考えるのは、それが例外的なことだったからだ。私の家族、そして友人の家族にも大学を出た人はいなかった。唯一の例外が新聞広告を頼りに高校を出て大阪で就職した母の妹で、しばらく働いたあと、まだ残っていた私立大学の夜間学部に入學した。私は、彼女が帰省するたびに回って、大学の話をせがんだ。しかしそれは日本全体という規模で考えると珍しい話でもなかった。

戦後、順調に伸びていった日本の大学進学率はオイルショックを期に停滞期に入る。それがもたらした不景気は比較的早い段階で脱したにもかかわらず、七〇年代、そしてあることか八〇年代も進学率は伸びない。その間の大学進学率は四年制だと二〇%台、学生のほとんどが女性であった短大を入れても三〇%台にすぎない。日本の高等教育への冷淡な態度は年季が入っている。進学率がふたたび上昇軌道に入るのは九〇年代前半のバブル景気、そして少子化によってであって、学生数そのものは進学率ほどには増えてはいない。

もっとも、大学に入ってから、何かの拍子に進学率が話題になったとき、大阪の公立進学校を出た同級生はそれを八割くらいだと考えていた。四分の一を少し超えるくらいだよ。私がそういうと、少し低めに答えたつもりなのにと驚いた

ような恥じ入ったような顔をした。故郷の中学は一〇クラスあって、一学年で五〇〇人近くの生徒がいたはずだが、大学に進学したのは三〇人を切っていた。日本の中でも場所によって時間は同じようには流れてはいない。いまでも多かれ少なかれ同じようなものだろう。ともあれ、大学は当たり前のもではなかった。家族にとつてはなおさら。

*

大学入学が決まって故郷を離れると、母はまるで文字通り子供を盗られる親のような大げさな反応をすることがあった。初めて海外に行くことになったさいも、「大学なんかに行ったら、こんなことになるんじゃないかと思っとたんさ」と、まるで戦場に向かう息子の見送りでもするかのように悲嘆に暮れた。阪神間の出身の妻は同級生なのだが、中高一貫、大学までエスカレーター式の女子中高生高だったから、こういう話をするに「戦前か」とゲラゲラ笑う。

「過激派だけにはなるまい」ということも何度も聞かされた。「い」という語尾はもちろん方言で、嘆願の調子がある。いまや「過激派」にも注が必要だろう。過激派とは、過激派学生のこと、暴力の行使を辞さない学生運動の「闘士」たちのこと指す。戦後の学生運動は五〇年代が青春時代、六〇年代が最盛期だろう。だが、七〇年代には大衆的な運動の限界を超えるほどに先鋭化してしまう。国内的には連合赤軍の浅間山荘事件がその象徴だが、さつき出てきた日本赤軍が起したテルアビブ空港乱射事件（いづれも七二年）は、すでに字面からおかしい。それは大量の死傷者によって国際的な衝

人格や健康的な身体及び生活習慣の形成に大きな影響を与えたと考えています。これらの経験が、運動やスポーツの指導者になりたいという思いにつながり、体育大学へ進学するきっかけとなりました。

また、大学での学びや競技生活を送る中で、身体運動を制限する要因が複数ある運動環境下では、それらが運動やスポーツ実施時のパフォーマンスにどのように影響するのか疑問を持ちました。これに対して科学的理解を深めたいとの強い思いが生じ、大学院医学研究科への進学へとつながりました。その後、幸運にも現在の都市健康・スポーツ研究センターに奉職させていただく機会を得ることができました。私は、現在、基幹教育科目の全学必修科目として、スポーツを題材とした「健康・スポーツ科学概論および実習」の授業を担当しています。皆さんとは、こちらの授業で直接かわるこ

社会や大学でのスポーツの位置づけ

さて、そもそもスポーツにはどのような価値があるのか、大学の授業でなぜスポーツを学ぶのかについて、詳しくは前述の概論の授業で解説されていますので、ここでは少しだけ紐解いておきたいと思っています。

スポーツそのものやスポーツ活動は、社会の進歩に寄与し、個人の心身両面にわたって健康を保持・増進して、人生をより豊かにすることが、国際組織、政府、地方自治体、学術会議・団体などで広く認識されています。したがって、大学の教育課程では、健康・スポーツを尊重して、その理解を深めることができるようになることが、めざすべき学修成果として掲げられ、重視されているのです。そのよ

うなスポーツについて、皆さんはどのような印象をお持ちでしょうか？

スポーツは好き？嫌い？

皆さんが、これまでに実体験としてスポーツに触れた機会は、その多くが学校教育課程における保健体育の授業にあつたと思います。そこでの経験が、現在でもスポーツと関わっているかないかに深く影響しているのではないのでしょうか（これに限るわけではありません）。スポーツは、そもそも楽しく、おもしろく、やってみて気持ちの良いものと思える経験が、私にはいくつもありません。したがって自ずとスポーツが好きになり、強く関心を引くようになりませんでした。一方、残念ながら私のような経験ができなかった方も少なからずいらっしゃると思います。そういった方々に対して私の経験から言えることは、スポーツを通じて「小さな喜び」をみつけること、経験することが、スポーツを好きになる近道であるということ。また、その喜びはスポーツを「する」以外にも、「みる」、「支える」、「助ける」以外にも、「みる」、「支える」といった多様なかわり方によって得られます。皆さんが社会へ羽ばたく直前の段階で、今一度スポーツの価値について考え、体験していただく機会として、「スポーツを通じて」大学での学びが提供されているのです。

保健体育から健康・スポーツへ

高校までの保健体育と、大学からの健康・スポーツの授業が、どのように異なるのかについても触れておきたいと思えます。高校では、身体や健康に関する知識やスポーツについて、基本的な知識を学ぶことに対して、大学では、学際的なアプローチを取り入れつつ、より専門的かつ深

撃を与える。大学という世界とは切れたところに生きてきた母のような人にとつての過激派とはそうしたイメージであり、そして私が入学した大学は、大阪市立大学と並んで関西の学生運動の中心だった。

もっとも母の心配は杞憂に近いものではあつて、私が入学した八〇年代のおわり、ヘルメットを被りタオルで顔を隠した、いかにも過激派風の学生たちはまだ大学に残つてはいたが、すでに「お祭り」は終わったという気配が濃厚に漂つていた。サークルボックスにあつた日本赤軍の写真も、すでにそれが撮られてから二十年近い時間が過ぎ、ロマンチックに美化され、安全地帯から眺めた過去の姿でしかなくなつた。

心のなかで「母ちゃんやべえよ、過激派も過激派、よりよって日本赤軍だよ」と一度は思ったものの、気がつくと、昼過ぎに学校に来ると授業にも出ずに、ガラパと呼ばれていたその「ボックス」に入り浸るようになっていた。次々とやってくる先輩、同級生、後輩、院生たち、芸術家の卵、喫茶店のオヤジ、ときには教員たちと音楽を聴き、まだ珍しかった衛星放送（なぜ見ることができたのかは秘密だ）、そしてビデオを眺めながら、青春の貴重な時間を無為に費やした。唯一の生産的行為は文字通りの「お祭り」、年に一度の学園祭で、四日間夜通しでディスコ（ああー）を経営し、水商売で荒稼ぎをした。安酒を高級酒の瓶に詰め替えていたという指摘については承知していない。昼は交通費に毛の生えたような安いギャラで有名人を呼んで講演会や対談を企画し、入場料をがつつり取った。そうした儲けはサークルの運営費になつて、ビデオデッキやコンピュータに消えた。気が

がつくと政治の時代はどこかに消え去り、バブルと呼ばれる、ひどく奇妙な好景気に突入していた。薄暗い地下で私は時代に取り残され、そのまま大学に居続けることになる。

界で仕事をするために、地下から地上に戻つたとき、すでにバブルは文字通り泡沫のように消え去つていた。いつのまにか進学率は五〇％を超え、六〇％に近づきつつある。それは一九六〇年の高校進学率にほぼ等しい。東京都は七〇％だ。そうだ。政治的見解の相違から命を失う学生も、亡命を余儀なくされる学生もいなくなつた。あれほど汚かつたトイレにもウォシユレットが装備されている。だが、情報化と国際化が急速に進むなか、いままも大学は、特別な場所のままであり続けているだろうか。

* * *

地下に向かう薄暗い階段の先には、壁に殴り書きされた、すでに色あせてしまったスローガン、そして黒く塗られた扉がある。ゆつくりとその扉が開く。ひよつとするといまなお、あの瞬間の余韻を生きているのではないかと思うことがある。

前川 真行（まえがわまさゆき）

1967年生まれ
1977年京都大学経済学研究所博士課程退学
現職：国際基幹教育機構・教授
専攻分野：思想史
担当科目：思想と社会、現代日本の政治と経済など

い内容に焦点が当てられています。健康・スポーツ科学では、関連する学問分野が多岐にわたるため、それらを包括的に学びます。また、実践や研究面での深化が強調され、スポーツ活動や健康づくりの実践によって、問題解決能力や社会性を養います。総じて言えることは、高校の保健体育は基本的な健康やスポーツの知識を学びながら、一般的な運動技能を身につけることを目的としています。が、

大学での健康・スポーツの授業は、より専門的で深い理解を求め、能動的かつ主体的に自ら実践していくことが重視されます。健康・スポーツ科学概論および実習では、前述の内容に加えて、多様なスポーツの楽しみ方を知る術と、健康的な生活習慣の形成ならびにスポーツライフの習慣化を目指しています。自ら理想とする健康的な生活を送るためには、実践を繰り返しながら継続した学びが必要となります。

ところで、最近では体育という言葉があまり使われなくなってきました。それは、体育で取り扱う領域が、より学際的・複合的となり、その名辞だけでは覆いきれなくなつたことや、社会の趨勢として行政機関や大学などで「体育からスポーツ」への名称変更の潮流が生み出されたことにあります。したがって、私達も「保健体育」ではなく「健康・スポーツ」という言葉を使用しています。

これからのスポーツ

これからのスポーツには、新たな価値を見出すことが社会的に求められています。それは、スポーツで「つくる／はぐくむ」、スポーツで「あつまり、ともに、つながる」、スポーツに「誰もがアクセスできる」といった表現で具現化されています。健康・スポーツ科学科目では、新たな取り組み

として、障がいのある学生が他の学生と共にスポーツに参加しながら、相互理解を深めることを主としたインクルーシブスポーツコースの開設準備を進めています。このコースでは、受講者すべてが社会的スキルを向上させながら、自己実現を達成できることをめざしています。

やさしい

皆さんは、これまで半ば強制的に与えられた環境で当たり前のよう、言い換えると親や先生からの愛情や教育的指導のもと、決められた日常生活の中で身体活動やスポーツを通じて、心身の両面にわたる健康の保持・増進が担保されてきたと思います。しかし、大学生活では、これまでそのような生活を過ごしてきた皆さんのトレーニング効果に期待して、ある程度の自由度が与えられます。その一方で自己責任が重くなります。高校までの生活と大学生の生活にはここに大きな違いがあります。より能動的、主体的に生活してくださいということだと考えます。大阪公立大学では、異なる分野の方々と迅速に交流できる環境が整っています。このことは、自らの視野を広げて異なる視点や諸問題の多様な解決策に触れる絶好の機会が身近にあるということを意味しています。その出発点としてスポーツを通じたコミュニケーションをとつてみてはいかがでしょうか。

今井 大喜（いまいだいき）

1982年生まれ
2011年大阪市立大学大学院医学研究科博士課程修了（博士（医学））
現職：職階：国際基幹教育機構（都市健康・スポーツ研究センター）・准教授
専攻分野：運動環境生理学
担当科目：健康・スポーツ科学概論・実習